〈郷土作家資料紹介〉

「向陵時報」紙上の日野啓三

山内祥史

一　府中中学から一高へ

日野啓三は、日本が戦いに敗れた一九四五（昭和二〇）年八月一五日当時、朝鮮京城の龍山中学校四年次に在籍していた。街で「朝鮮独立」の「祝賀デモ」が続き、「亡国の民」として不安な日々を過ごしたようだ。同年一一月「引揚げ船で釜山港」を離れ、家族と共に福山市郊外の「父の郷里の家」に落ち着いた。直後、福山誠之館中学校への転入学を申し出たが、「外地は程度が低い」という理由で断られ、府中市の府中中学校の四年次に転入学。翌一九四六（昭和二一）年四、五月、旧制第一高等学校文科甲類を受験して、七月に合格が決定した。中学校四年修了で第一高等学校文科甲類（第二外国語ロシア語）に進学。九月五日新入生の入寮が開始され、九月九日入学式、翌一〇日入寮式が挙行された。

一方、第一高等学校寄宿寮発行の「向陵時報」は、一九三〇（昭和五）年一月一七日付で第一号が発行され、一九四四（昭和一九）年五月三一日付で第一五七号の「終刊特輯号」が発行されて廃刊。「二星霜」を経て、戦い終えた後の一九四六（昭和二一）年六月二二日付で復活第一号の第一五八号が発行されている。日野啓三入学後に、最初に発行された「向陵時報」は、一九四六年一二月七日付発行の第一五九号であった。

その第一五九号の第一面には、「新入生出身校調査」という見出しの記事が掲げられている。「七月十六日発表による新入生出身調査は左の如く、東京出身四四・二％、関東地方一五％その他となつてゐる。」という前書きの後、（入学者数）と出身中学校名とが列記されている。入学者数（一）のうちに「府中」があって、これが入学者日野啓三とその出身中学校名と知れる。因みに、この年福山誠之館中学校からの一高への入学者は、なかったようである。

二　一高入学の頃

第一五九号には、「謹悼　原口統三君」の特輯が組まれて、橋本一明「歌なき勝利―原口統三兄の死を悼んで」と宇田健「近代人―原口統三に捧ぐ―」とが掲げられている。原口統三は、一九二七（昭和二）年一月一四日、京城生まれ。植民地育ちの秀才で、「終戦前後の一高寮でその詩才が畏敬された」（清岡卓行）が、一九四六（昭和二一）年一〇月二五日夜、逗子の海に入水して、自ら二〇（満一九）歳の生

命を断った。同じ植民地育ちの日野啓三が、原口統三の追悼記を、どのような想いで読んだのか、原口統三と同じ年齢の時、自殺を図った事のある私には、興味がある。しかし、日野啓三の回想に従えば、当時の彼は、同紙の「論説」欄に掲げられた上田耕一郎「唯物弁証法に就て」等の方に、より興味を持ったのであろう。

入学後、日野啓三は、弁論部に所属し、寄宿寮は北寮一五、一六番の弁論部室であったという。一九四七（昭和二二）年二月一日付発行の「向陵時報」第一六〇号によれば、「一高弁論班　朝日討論会優賞（ママ）」の見出しのもと「我国最初の試なる朝日新聞社主催大学高専討論会に一高チームは優勝した」として、その「経過」の詳細が述べられ、更に、復活した「一高三高聯合弁論大会」の模様も、一人一人の弁論内容まで紹介、結果、土井教授から「三高の敗北」が述べられ、一高は「好成績を挙げ得」たとある。一高弁論部が際立って華やかに活躍していた様子が知られる。「向陵時報」には、他にも「向陵生活」についてや「自治寮」について初め、日野啓三が「ものの見方、考え方、生き方の基本を習った」と回想しているような、様々な論説、随想、創作、詩などが、多く散見する。

三　文学への目覚め

自筆「年譜」によれば、一九四七（昭和二二）年の項に「二年生になって偶然に文芸評論家荒正人氏の講演を聞いて、戦後文学という新しい文学を知り、野間宏、椎名麟三、埴谷雄高などの新作を熱心に読み始める。」と「文学に引かれ」てゆく、己が情況が述べられている。一九四八（昭和二三）年二月一日付発行「向陵時報」第一六二号の文芸部「詩の春に寄す」には「時報の投稿が現在一高の文芸発表の唯一の機関である」とあり、同紙末尾には、「向陵時報部」からの「向陵時報原稿募集」という見出しの次のような広告が掲げられている。

向陵時報第百六拾三号の原稿を募集する。論説一般、文芸作品すべて有能なる投稿を期待する　四百字三拾枚内外、カツト写真等は明寮二階時報室迄持参されたい。新人の登場を切に望む。

これを見て、日野啓三は、「向陵時報」への「創作」の投稿を決意したのであろう。一九四八（昭和二三）年六月二五日付発行の「向陵時報」第一六三号には、「向陵時報編輯部」の委員杉山邦衛の「編輯後記」が掲げられていて、その一節に次のような言説が見られる。

「狭き門」の作者日野君に一言。秀れた点少くありませんし、働く学生の創作として成功してゐる点は多いのですが、働く学生その人が、「苦しいバイトの中から残した金で買つて行つたアジの干物を涙をこぼさんばかりにして喜んで食べた故郷の病床の母」を無抵抗に思ひ浮べる人間であつてはなりません。事実さうであるのだから仕様があるまいと言はれると困りますが、創作と銘打つには、矢張り異つた要素が必要でせう。それは、ひとつの主点を明晰判明に、修辞学上からも明晰判明に表現する技なりと決定します。若し更にそれが誤りであるとすれば、寧ろ君自身の生活が小説に書かれぬ方がより貴重なのではないかと考へます。之は一聯の人々に対する僕の苦言です。併し乍ら結局最後に、悪作にては決してなかつたと断じます。

ここに批評されている日野啓三の創作「狭き門」は、残念ながら現

在見る事が適わない。没になったものと思われる。だが、「駒場の一高寄宿寮」で「ものの見方、考え方、生き方の基本を習った」という日野啓三にとって、この杉山邦衛の「苦言」は、学ぶべき点のある批評と感じられ、次の創作に生かされる事になったようだ。

四　創作「永劫の図」

一九四八（昭和二三）年八月一日付発行の「向陵時報」第一六四号全二面の第一面には、森有正「勉強といふことについて」と日野啓三の「創作　永劫の図」が掲げられ、第二面には、杉山邦衛の創作「卑怯な心」と片山穀の随筆「模倣の心理」が掲げられている。森有正、片山穀の二編は、一高教師の依頼されて寄稿した随想であって、この号の中核となっているのは、日野啓三と杉山邦衛との二つの創作である。日野啓三の創作は、杉山邦衛の先の「苦言」を尊重した結果か、作者「その人」が主人公でなく、また、作者「自身の生活が小説に書かれ」てはいない。この創作「永劫の図」については、いずれ著作権所有者の了解を得た上で、全文を紹介したいと思っている。

第一六四号の時報委員杉山邦衛の「後記」には、発行に到る経緯が次のように述べられている。

嵩む一方の印刷費、並びに用紙入手の加はる困難性に災されて、向陵時報の増刊は愚(ママ)か定期の発行さへ危くなつて来てゐる。其の至難性の根幹を衝きたく思ふ。（略）私はこゝに唯一つのことを試みてみた。四面を二面になして二回の発刊とすることである。論説に主点を置いたのだが、惜むらくは投稿が全く無かつた。為に偏つた紙面となつたが、実は私の案じてゐたのは専ら経費と印刷との問題である。

幸ひ中央会計委員仙石敬君其他諸兄の御厚意から相当額の資を獲(ママ)て、実現の運びをとることが出来た。

片山先生、森先生の原稿依頼に際しての快諾は嬉しく、忘れることができない。

各二篇の詩と短歌、一篇の俳句は到底とるに耐へなかつた。日野君の作品、難詰で胸が一杯なのだが、毎回の熱心な投稿には、情にほぐ(ママ)されたかたちとなつてしまつた。

文芸部は蹉跌続きであり、向陵ルネツサンスの幻夢は嗤ふべきであると思ふ。

「文芸部」復活の夢は砕かれていた当時、「文学」に目覚めた一高生日野啓三が作品を投稿できる機関は、「向陵時報」だけであった。第一六三号へ「狭き門」、第一六四号へ「永劫の図」と、毎号創作を「投稿」する日野啓三に、時報委員杉山邦衛は、心打たれたのであろう。文学作品のうち、詩、短歌、俳句は没にしたが、「日野君の作品」は「難詰で胸が一杯」だが、「毎回の熱心な投稿に」情に絆されて掲載したという。どのような「難詰で胸が一杯なの」かは、書かれていないので、不明だ。

五　創作「同志」と時報委員

一九四八（昭和二三）年六月二五日付発行の「向陵時報」第一六三号に、「原稿募集」と題する次のような文章が掲げられている。

第百六十五号の原稿を汎く募集します。論説、評論、創作、詩歌。締切九月十五日。投稿は正門脇投稿箱又は明寮三階読書室迄。

「向陵時報」第一六五号は、一九四八（昭和二三）年一一月三〇日付で発行されているが、その第三面の「文芸」欄に日野啓三の創作「同志」が掲載されている。この作品は、先の「原稿募集」の「締切」から推して、一九四八年九月一五日頃迄に脱稿されたものだろう。稲垣眞美は『旧制一高の文学』（国書刊行会、二〇〇六年三月三日付発行）で、「同志」の梗概を次のように紹介している。

日野の「同志」は、まさに党活動にも関わった体験に裏打ちされている。主人公は、学生の共産党員大会の席上、思わぬ旧知の姿を見出して息をのむ。その友は、かつて陸士に進んだ軍国主義の固まりのようないかつい男だったのだ。それがいまや実践力に富む優秀な党員となっている。主人公はわりきれぬ思いにとらわれるが、やがて共にデモの列に加わり、ウンカのような武装警官隊を前にして、二人はしっかりとスクラムを組んでいた。

また、大岡信「日野啓三、思い出」（「すばる」第二四巻第一二号、二〇〇二年一二月一日付発行）には、次のような言説がある。

日野啓三には「向陵時報」に発表した小説が一つだけあって、これは彼自身、たぶんどこでも触れたことがないから、自分では若書きとして否定していたのかもしれないが、もう名を挙げても許されるだろう。それは「同志」という題の、いわゆる同伴者文学的な短編だったと記憶する。

この「同志」についても、先の「永劫の図」と共に、いずれ著作権所有者の了解を得た上で、全文を紹介したいと思っている。

却説、第一六五号の第四面には、「（第百七十五期　寄宿寮委員）」が紹介されていて、中に「学芸文甲三ノ一北十三　外信也」「時報文甲三ノ三北十三　日野啓三」とあって、学芸委員に外信也が、時報委員に日野啓三が就任したと知れる。第二面の「論説後記」には、（S）の文章と共に、「日野」の次のような文章が掲げられている。

この度は市原先生と八杉先生から原稿をいただきました　市原先生には生徒課長の多忙の中を、又八杉先生には非常な御老体にも拘らず快よく御寄稿下さったことを深く感謝する次第です。又論説の選衡その外は外君におねがひしましたが忙しい中をよくやってくれたことを併せてお礼申します。

また、「同志」の掲載された第三面末尾には、外信也の「小説というもの」と題する、次のような文章が掲げられている。

僕達が小説を書いて友達に見せると大抵、それは小説ではないと一言のもとに言われる時が多い。たしかに下手なのだからそれももつともだと思うが、やはり小説らしいということをはつきりさせてから批評するのが当然だらう。

何が小説なのだろう。一言にいうことは出来ないし、無理にいえば誤か不充分なものになる。だが、ごくありふれたことだけれどもリアリズムが根底となるべきだと思う。小説はリアルなものを、如何に表現するかということ。勿論初めにことわつた通り、それは一要素にすぎないかも知れぬが。

大衆小説の持つているものは偶然と感傷のみだそうだがいわゆる純粋小説にそれがあつてはならないとはいえないと思う。僕はむしろ偶然―可能性を求めたい。たゞしリアルな可能性を。しか

もそれがロマンチツクに！　二十世紀の悲劇は可能性とロマン主義―英雄主義の喪失に始つた。十九世紀の産物だと思つていたがそれが、現代のヒーロー絶望を追い出す時が来ている可能性を身につけた英雄！　オプチミストこそ僕達の友となるだろう。

日野君の「同志」は僕のこういう気持に近づいているので大変嬉しく思つた。こまかい技巧の点は僕にはよくわからないが、君の創作態度に同感する。だが作品そのものは色々不満に思つた。それはリアルなものでない処だつた。特に終りの方など。いかに生きるか、君はもつと可能性について確信を持つて下さい。虚無も絶望もリアルな可能性――実はそれが必然的なものであるのだが――の中に止揚することが今後の途ではなかろうか。

早くに日野啓三の創作を論じた、注目すべき文章といえよう。この評言は、日野啓三に浸透して、彼の生きる姿勢の生成に深く関わったように思われ、興味深い。

なお、第一六五号の第五面には、「文芸欄後記」が掲げられ、（N）の署名がある。中山泰三の手になるものだろう。また、最終第六面末尾には、「編集後記」と題する一文が掲げられている。少し長くなるが、次に引用しておきたい。

「逢びき」といふ映画をみた人はあの中に描かれた世界が知性人の辿りつく最後の風景に外ならぬことを夫々に実感したであらう。クロスワードの空白を埋めながらその黒と白との不規則な市松模様の向ふに妻の心の旅路を見つめてゐた夫の心には知るといふことの果にくる人間が一切のものから隔てられてゐるといふ孤独とそこから生れる虚しさとけん怠があつた。サルトルの「嘔吐」が生れるためには西欧の知識人の生活の上に何回かの「逢びき」の様な風景が繰返されて来なければならなかつたのである。そして孤独の極限まで行きついた自分自身をまじまじと見つめることによつて、彼は自己の存在の虚しさと共にその虚しさに支えられてゐる自分の存在を感じそして凡てのものを吐いてしまふ。そこにひろげられた吐瀉物はいはゞ彼の生活をとりまく知性のまやかしと孤独と慣（ママ）れ合ひ虚無を享楽してゐる自我のみじめさに外ならない。人間が生きること、愛することのために、知ること理解することはもはや何の役にもたたないといふ事実が彼の心にのしかゝり、そのときなほも生きようとする最後の意志が彼を嘔吐させる。愛することのためには心の旅路に疲れ切つた妻の手の上に自分の手をのせることだけで十分なのだらうか。彼は妻の横面を張りとばすためにその右手を使ふべきではなかつたか。

小説七篇、評論七篇、詩十数篇の数多い作品を読み返しつゝ僕の感じたのはそなん（ママ）ことであつた。結局次元の低い孤独は次元の低い救ひで癒されるであらうし、高い孤独と絶望は遂に激しい嘔吐となつて新しい地平を切り拓くであらう――特に文芸作品に就いて僕の言ひたいことなのである。それは又過去の日本文学の伝統全般について言はれ得ることなのであるが。

安つぽい上りは勿論排されねばならぬ。然し二十世紀も半を過ぎんとし新しい世界が新しい歴史の担ひ手によつてたくましく繰りひろげられようとしてゐるこの動乱の中にあつてなほ且つ次元の低い知性のまやかしに沈り（ママ）んとする精神を僕は敢えてきう弾したいと思ふ。さう言つた意味に於いて北村君の「泥ねい」小

林君の「夕焼」に比べるとき、山本君の「童貞」は構成に於いて失敗したとはいへ新しい可能性を求めて這ひづり上らうとする烈しい意慾に満ちた麗しい作品であつた　唯目的意識のない実践は正しくその名に値しないことを考へて欲しい。真杉君に一言、現実の表面を撫でるだけではよしそれが善い方向を捉へたとしても高いレアリズムとして結晶しない。主題の積極性と共に対象の把捉の幅といふか、深さといふかえぐり出すといつた様な感じ――それは趙君の「病躯」にも言ひたいことである。中山君のは技巧的に（筋の上からも表現の上からも）完成された好品。唯、前述の全般的な感想は中山君の作品も例外ではないと思ふ

詩の評は中山君に頼んだ。掲載出来なかつたが河合君の映画論、関山君、辻君のエツセイ等の力作があつた。山本君の歌舞伎論はわざわざお頼みしたのであるが紙面の都合上割愛した。御諒承。

試験その他でとりかゝりが遅れ、資金、用紙、印刷所等の関係で発行の延びたこと深くおわびする次第である。

国内的に国際的にもフアツシズムの巧妙な復活がある　ろう劣で邪悪な精神と反文明的な暴力が再び組織化されようとしてゐる。我々は一九三〇年の誤謬を二度と繰返してはならぬ。今こそ自覚せる知識人が甘い虚無と諦念の眠りから醒めてその善意と理性の一切を傾けるべき秋だ。

「我々は愚昧と痴呆は許せても悪意と非理性の精神を許せ[以下一行分不明]」

私の入手した「向陵時報」第一六五号の複写では、「編集後記」の末尾が不鮮明で、読み取りが困難である。それで、文末に記されているであろう、筆者の署名も不明だ。しかし、前の第一六四号の場合、「後記」末尾には「（杉山）」とあって、同号発行時の時報委員杉山邦衛が筆者と知れる。また、後の第一六六号の場合、「編輯後記」末尾には「（大岡記）」とあり、同号発行時の時報委員大岡信が筆者と知れる。これらから、第一六五号の「編集後記」の筆者は、同号発行時の時報委員日野啓三であった可能性が高い。この「編集後記」には、凡庸でない筆力が潜んでいて、日野啓三が筆者に相応しいとも思う。

猶、日野啓三は、「向陵時報」第一六五号の発行後、一学年下の大岡信を時報委員の後任に指名して、一九四九（昭和二四）年四月、東京帝国大学文学部社会学科へと進学した。

〔付記〕二〇〇七年四月頃、偶然に相馬庸郎氏編著の個人誌「日野啓三研究」第一号（二〇〇六年六月一日付発行）の存在を知って、その「あとがき」で、ふくやま文学館で「日野啓三の世界」展（会期自二〇〇五年一〇月一四日至二〇〇六年一月二二日）が開催された事を知った。ふくやま文学観では、図録「日野啓三の世界」も発行されていた。相馬庸郎氏の個人誌「日野啓三研究」は、第二号（二〇〇六年八月三〇日付発行）、第三号（二〇〇六年一二月二〇日付発行）と号を重ねていて、過日第四号（二〇〇七年七月一〇日付発行）が発行された。相馬庸郎氏とふくやま文学館の尽力に敬意を抱き、それら一連の動向に刺戟されて、自分でも思いがけなかった、このような日野啓三関係資料の紹介を思い立つに到った。この拙稿は、「戦後の『向陵時報』」「日野啓三『向陵時報』の習作」と併せて、三部から成る「日野啓三と『向陵時報』」の「Ⅱ」に相当する部分である。

（やまのうち　しょうじ）